

## ペルシアの正義：ペルシア側の Casus Belli（つづき）

ペルシア戦争に関するペルシア側の評価と見解は伝えられていない。今日残されているのはアテーナイを中心とするギリシア側の評価と見解だけである。しかしクセルクセスの『ダイワ碑文』やギリシア側の史料（ヘロドトスやクテシアスなど）からペルシアがそのギリシア遠征を評価するとするならどのようなものとなるのかを類推することは不可能ではない。邪悪に対する正義の回復と邪悪な行為に対する懲罰というスタイルから公式声明を推定することはできる。

ペルシア側からすれば、ペルシア戦争（ギリシア遠征）は協定を反故にし、ペルシア王の権威を否定したうえその領土と人民に危害を加え、神への神聖な誓いを侵犯したアテーナイに対する懲罰・報復、正義と秩序の回復でしかなかった<sup>1</sup>。ブリアンはギリシア遠征に関するペルシア側の公式の声明を想定しているが、『ダイワ碑文』からの自然な類推だと思われる<sup>2</sup>。帝国の公式声明があるとなればそれはギリシア遠征の失敗と領土の喪失を認めるものではなかったであろう。アウラマズダーの定めた秩序と正義を破壊したアテーナイ人と、これに協力した邪悪な人々（スパルタ人を含めて）をクセルクセスがアウラマズダーの助けを得て打ち破り、世界の秩序と正義を回復したことを高らかに宣言するものであったであろう。ローマ時代のディオ=クリュソストモスははるか後世の人であるが、「ギリシアへの遠征の間に、クセルクセスはテルモピュライでラケダイモン人に対して勝利をおさめ、レオニダス王を殺害した。ついで彼はアテーナイを占領して荒廃させ、逃れ損ねた住民すべてを奴隷に売り飛ばし、これらの成功を収めた後、ギリシア人どもに税を課してアジアに戻った」と記している<sup>3</sup>。勿論これがペルシアの真正の宣言を伝えている訳ではない。しかし時期的にギリシア遠征より後に属する『ダイワ碑文』が海辺に住むイオニア人や海の向こうの（イオニア人）を帝国の版図に含めているし<sup>4</sup>、サルディスの総督がアテーナイ人の支配下にある諸都市に課せられる大王への税をペロポネソス戦争期に至っても負担し続けていたとトゥキュディデスは指摘している<sup>5</sup>。これらはペルシアが公式にはギリシア遠征の失敗と領土の喪失を認めていなかったこと

---

<sup>1</sup> サルディスの破壊とそれに対してダレイオスが弓を放ってアテーナイ人への報復を誓い召使にアテーナイ人を忘れるなど毎日言わしめたという逸話が参考になる：Hdt. 5. 105. 1-2. ヘロドトスは「代価を払わさせる」という言葉を用いている。

<sup>2</sup> Briant, 2002, p.542.

<sup>3</sup> Dio Chrysostomos, 11. 149.

<sup>4</sup> 伊藤、一九七九年、一三八頁。

<sup>5</sup> Thuc. 8. 5. 5.

を示しているように思われる<sup>6</sup>。

## 帝国の防衛

前四八〇年のギリシア遠征の失敗とヘラス同盟軍の反撃を従来の研究は過大評価してきたようである。ミュカレーの戦いの後、イオニア全体が雪崩を打ってペルシアの支配に反旗を翻しヘラス同盟軍を解放者として迎えたかのような印象が一般的に持たれている。これはヘロドトスがイオニア人の二度目の反乱と指摘していることに起因している<sup>7</sup>。

これに対してブリアンはペルシアの小アジアでの喪失は最小であったとし<sup>8</sup>、デロス同盟結成後のアテーナイの攻勢に対してブリアンはペルシア側の防衛が成功したとみなしている<sup>9</sup>。そしてこの防衛にクセルクセスは関心を失うことはなかったと主張する。ミレトスはペルシアの手にとどまったと考えている<sup>10</sup>。ヘロドトスはマスカメスによるドリスコス防衛に成功したことを強調している<sup>11</sup>。アテーナイ側による成功は孤立したものであって、後が続かなかったとブリアンは指摘する。確かに前四七八年にアテーナイはキプロス島のいくつかの町を占領したが、その後の前四七〇年代の間にペルシアがこれらを奪回している。それにその後のアテーナイの矛先はエウボイアのカリュストスやナクソスなどに向けられていて、トゥキュディデスはアテーナイによる小アジア遠征については全く言及していないと論じている。またキモンの小アジア沿岸における活躍をプルタルコスがエウリュメドンの戦いの直前に置いていること<sup>12</sup>、ディオドロスはカリアやリュキアに至るまでの小アジア沿岸の諸都市をキモンがペルシアから奪取したことをエウリュメドンの戦いに直結する遠征に含んでいること<sup>13</sup>からミュカレーの戦い以降、デロス同盟による小アジアのペルシア領攻撃はなかったと推定している<sup>14</sup>。そして前四六六年のエウリュメドン遠征の際にも小アジアの住民によるアテーナイの攻撃に対する抵抗があったことに着目し、パ

---

<sup>6</sup> トウキュディデスが伝えるペルシアとスパルタとの第一次同盟条約はペルシアが決して領土放棄を認めていたわけではなかったことを示している (Thuc. 8. 18. 1)。

<sup>7</sup> Hdt. 9. 104:このようにしてイオニアは再度ペルシアから離反した。

<sup>8</sup> Briant, 2002, p.540.

<sup>9</sup> Briant, 2002, p.555ff.

<sup>10</sup> ブリアンが根拠としているのはディオドロスの「ギリシア人に対して戦を継続するために、軍の一部をサルディスに残した」(D. S. 11. 36. 7) という記述である。Briant, 2002, pp.540-541.

<sup>11</sup> Hdt. 7.106.

<sup>12</sup> Plut. Cim. 12.1.

<sup>13</sup> DS. 11.60.4.

<sup>14</sup> Briant, 2002, 556.

セリスの事例も自発的にアテーナイに降伏したのではないことを指摘する<sup>15</sup>。そして前四六六年のエウリュメドン遠征の時点で、多くの小アジアの諸都市はペルシアの領域の中に留まっており、ペルシアの守備隊が各所に駐留していたと考えているのである<sup>16</sup>。

## 結論

クセルクセスが軟弱な君主としてギリシアの歴史家たちから批判を受けるのは何よりもギリシアの最大の敵であったからであり、ギリシアの存続にとっての最大の危機をもたらしたからであり、そのギリシア人に戦いで敗れたからに他ならない。しかしクセルクセスはギリシア征服よりは遥かに帝国にとって重要なエジプトの反乱を平定し、バビロンの蜂起を粉碎するという大きな功績を残している。

現在のところ私はクセルクセスがギリシア人の描くような本質は怯懦であるにも関わらず外面はごう慢で残酷で人としての分を弁えないそのような帝王であったのかどうかという問題には関心を持たない。クセルクセスがどのような性格の人物であったとしてもギリシア遠征を企て自ら親征して敗北したという事実が変わりはないし、帝国の根幹を揺るがすような大敗北を喫することもなかったという結果が変わりはないからである。そのような問題について議論を重ねても所詮古代ギリシア以来の欧米人のアジア観の是非を論じる袋小路に陥ってしまうだけである。

しかし次の事実だけは指摘しておきたい。クセルクセスは自らを *khshavarsha*（「王の中の英雄」という意味）と称していること<sup>17</sup>、西方の伝承とは異なり東方の伝承では生真面目な支配者であり、友人や敵に対して非常に気前良く、優れた判断を下し、恣意的に行動することはなかったと。またロジャーズによれば、クセルクセスの時代は考古学的にはデカダンスの時代ではなくペルシア文化の黄金時代であったと評価され、クセルクセスの統治は全体としては帝国の統合と力強さ、決断力に優れ、まじめで能力に恵まれた統治であったと研究者達によって見直されるようになってきているということである<sup>18</sup>。

既にペルシア戦争史研究もギリシアの伝統的な文学と政治プロパガンダから脱して、スパルタやアテーナイは有能な君主と優れた行政機構を持ち、想像を絶する国力を誇る東方の大帝国と対峙していたのだということを前提に見直していくことが要求される段階になってきている。スパルタやアテーナイは決し

---

<sup>15</sup> Briant, 2002, 556-557 ; Plut. *Cim.* 12.4.

<sup>16</sup> Briant, 2002, 557.

<sup>17</sup> Rogers, p.95: ペルセポリスの大宮殿の扉にある碑文。

<sup>18</sup> Rogers, p.95.

て虚栄心に固まった見掛け倒しの大軍と対峙していた訳ではない。優れた補給機構に支えられ、経験と忠誠心に十分な信頼のおける高級指揮官に補佐され、プロの戦闘集団を核とする陸海の大軍を統率し、王家の伝統と使命に忠実な壮年の支配者と対峙していたのである。